

## 富田弘一郎さんを偲ぶ

古在由秀（ぐんま天文台）

元 東京天文台職員（講師）の富田弘一郎さんは、2006年5月22日、81歳で亡くなった。

富田さんは1925年2月16日に東京で生まれ、青山学院中学部に入学すると、子どものころから好きだったので、天文部に入った。その天文部には、作曲家の団 伊玖磨さん、物理学者の中野薫夫さん、英文学者の原 恵さんも同じころにいたと聞く。また、青山学院の先輩・後輩の清水一郎・実さん兄弟、小平桂一さん、神田 泰さんも、東京天文台で活躍した。

富田さんはまた、東京天文台技師であった神田茂さんの主宰する、日本天文研究会の活動に参加していた。中学校を1942年に卒業すると、東京物理学校（現 東京理科大学）の夜間部に入學し、昼間は当時麻布にあった東京帝国大学の天文学教室で、古畑正秋さんの手伝いをするようになった。そして、1943年2月5日、北海道での皆既日食観測に参加した。ところが、これが学年末試験にぶつかり、物理学校での卒業を断念したのだと、富田さんは言っていた。

そこで1944年、職を辞め、新設の青山学院専門学校（現 青山学院大学）土木建築学科に入學したが、在学中に兵役に服し、敗戦当時には憲兵をやったらしい。1947年青山学院を卒業し、東京天文台で働くようになった。土木建築を学んだのは、父上の仕事を継ぐためだったようだが、姉上から、好きな道に進みなさいと励まされてのことだったそうである。後に発見した小惑星の一つに、その姉上の名前をつけている。

富田さんが勤務したのは、広瀬秀雄さんの天体掃索部（通称天掃）で、広瀬さんの下には、下保茂さん（1936年に Kaho-Kozik.Lis 彗星を発見）と真鍋良之助さんがいた。広瀬さんの仕事は、小惑星の軌道計算から、小惑星・彗星の位置観測、掩蔽の観測、2地点での流星の同時観測による軌道決定などであった。65 cm 屈折望遠鏡も天掃が



1985年、東京天文台退職記念パーティでの富田さん。

管理しており、第二次世界大戦中に、ドームの屋根を載せたレールが通る溝を塞いでしまっていた雀の巣を取り払うのが、富田さんの最初の仕事の一つであったそうである。

富田さんは、広瀬さんの観測方面の仕事すべてに携わっていた。筆者は1951年に天掃に加わったが、富田さんの活躍にはすさまじいものがあった。彗星や小惑星の位置観測は、三鷹構内の南東の隅にあったブラッシャー写真儀を使っていたが、望遠鏡で星のガイドの最中、気温零度以下の真冬の寒いドームの床にごろりと横になり、10分間ほど睡眠をとっているのを、実際に見たことがある。流星観測では、三鷹構内と川崎天文同好会の箕輪敏行先生の勤務する小学校に流星儀を置いていたが、交通手段は自転車であった。

1950年代になると、掩蔽を利用して、日本と世界の測地系を結びつけるという広瀬さんの構想実現のため、1P21という光電管を使って、2地点で同時観測をして、2点間の距離を測定する実験が行われるようになった。三鷹での観測とともに、われわれもトレーラー付きのワゴン車に40 cm望遠鏡を載せ、関東一円に毎月出張するようになった。東京天文台には、まだ一人しか運転手さんがいなかったため、われわれの移動を円滑にするため、富田さんが車の運転免許をとった。



掩蔽の出張観測時の富田さん。中央は竹内端夫さん、左は古在（1955年ころ）。

出張先は大体が小学校で、校庭で望遠鏡や光電管からの記録装置を組み立て、畳の部屋を借りて休み、夜の観測が終わるとそれを撤収するという作業が続いたが、冬の田んぼに、車がトレーラーとともに半回転して落ちたこともあった。まだ車が少なかった時代であったので、始まったばかりの民放ラジオの、ボクシング中継後のスポットニュースとして、これが報道されたい。

1957年10月に、旧ソ連のスプートニク1号が打ち上げられると、その観測や、全国から送られてくる観測データをもとにした予報計算もわれわれの仕事になり、富田さんもその先頭になって活躍した。そして、掩蔽より人工衛星利用のほうが測地網接続に役に立つことがわかり、掩蔽の同時観測はやめになったが、1958年の春には、三鷹に人工衛星観測用のベーカーナン・カメラが来て、それがまた天掃の仕事となった。この設置のためにスミソニアン天文台からやって来た技術者は、富田さんの手さばきのよさに驚いたらしい。

時代は進み、1960年に岡山天体物理観測所、1962年に堂平観測所が設立された。富田さんはその設立にも力を貸し、その後、活躍の場は三鷹か

らそちらに移った。ベーカーナン・カメラも堂平に移り、人工衛星のレーザー測距観測も始まった。

富田さんは、設立当初の堂平観測所の91cm望遠鏡で、1964年にTomita-Gerber-Honda彗星を発見し、また三鷹時代の1957年から68年の間に、13の周期彗星の回帰を世界に先駆けて検出した。こうして、富田さんの名前は、国際的によく知られるようになった。小惑星については、三鷹のブラッシャー写真機を使い、230余りの小惑星の観測を報告しているが、新しい小惑星の発見は、1978年11月、フランスのCERGAに滞在した時で、そのシュミット望遠鏡で、後に確定番号のついた九つの小惑星を発見し、CERGA、青山、畑中武夫、そして姉上などの名前をつけた。

富田さんの履歴書を見ると、1963年に東京大学助手、1971年に講師になったが、それとはかわりなく、超人的な活動は1985年に退職するまで続いた。そして、堂平はもちろん、岡山にも車で通い、1カ月に30日出張するということがたびたびあった。その間にも多くの著書を刊行し、月刊誌「天文ガイド」には、毎号いくつかの文章を載せていた。富田さんは、退職前2年間は、観測をせずに仕事の整理をしようと言っていたが、最後まで観測の鬼で、観測はやめなかった。

富田さんは、何時のころからか、IAU総会出席を中心として、外国によく行くようになり、自動車旅行も楽しんだらしい。東京天文台退職後はAESという、宇宙開発事業団関係の職場で、病気で倒れるまで働いていた。

このように活躍した、富田さんのご冥福を祈りたい。